

立原道造記念館



題字・鹿野琢見

はじめに

宮本 則子

「立原道造記念館」は、二四歳八か月で夭折した詩人・建築家である立原道造の顕彰を目的として、一九九二（平成四）年に「設立準備室」を開設し、一九九七（平成九）年三月二十九日、開館の運びとなりました。それから一三年六か月の時を経て、諸般の事情により昨年九月に休館いたしました。

開館以来、関係各位や「立原道造の会」会員、多くの立原を愛する方々に支えられ、ここまでやってきました。その間、運営にご尽力くださいました生田テル・伊藤憲治・猪野謙二・江黒家成・小山正孝・鹿野琢見・国友則房・小場晴夫・杉浦明平・鈴木亨・武基雄・土井治・豊田泉太郎・中村真一郎・長谷川泉・室生朝子・渡会正彦氏ら（五十音順）が鬼籍に入られました。そして、昨年四月一六日には、初代館長（二〇〇三年四月から名誉館長を務められ、かげになり日なたになり館の支えと



館長就任時の堀多恵子氏

なってくださった堀多恵子氏が九六歳のご生涯を閉じられました。

以下に、堀氏が、当館の館報・図録等へご寄稿くださった文を再録することにより、氏への哀悼の意を表しますとともに謹んで冥福をお祈り申し上げます。今号を「堀多恵子追悼号」とさせていただきます。

第53号 目次

はじめに	宮本 則子
堀多恵子名誉館長を悼む	堀 多恵子
開館にあたって	堀 多恵子
立原道造と堀辰雄と『四季』	堀 多恵子
立原の親友だった生田勉さん	堀 多恵子
ごあいさつ	堀 多恵子
立原さんとアサイさん	堀 多恵子
休・閉館のご報告と今後の方針についてなど	宮本 則子

堀多恵子名誉館長を悼む

以下掲載文執筆 堀 多恵子

開館にあたって

立原道造にゆかりのある弥生の地に立原道造記念館が出来る運びとなりました。

立原はその青春時代を友人たちと語りながらこの界限を散歩したことだろうと思います。今ではその昔を彷彿させるものが少ないとは思いますが、立原が大学を卒業した年、昭和一二年の夏と冬に出版した二冊の詩集『萱草に寄す』と『暁と夕の詩』は今も多くの人たちに愛読されています。

立原は思いついたことをその場で書き、友人たちに書き送っていたようで、沢山の書簡がその手もとに残されています。そうしたものは立原を知る上で大変貴重なものだと思います。その他にも原稿や詩、ノート類、そして設計図も残されていました。没後、四回に渡って『立原道造全集』が刊行されています。

今回、開館にあたり、立原が死の前年、第一高等学校同窓会『会報』に掲載した作品「ふるさとの夜に寄す」をタイトルとして展示を行うことになりました。

二四才と八か月という若さで逝った立原の詩は青春そのもので、その美しい出会いと別離の悲しみを歌い、人々の



立原道造 1932年

魂にふれ、多くの若い人たちに愛されてきました。今、記念館の展示の数々によって立原の心を探求してゆけたらと思っています。

開館にあたり、多くの方々から御協力頂き、貴重な資料を御寄贈および御貸与して頂きましたことを厚く御礼申し上げます。

一九九七年三月二九日

立原道造と堀辰雄と『四季』

立原道造が堀辰雄を向島の家に初めて訪ねて来たのは昭和七年の春頃だったようだ。が、その時辰雄は不在で会えなかった。この年の正月、賀状に「こ

の頃は太抵起きてゐるから遊びにきたまへ」、こんな言葉がある。辰雄はその頃「聖家族」を書いたあと咯血をして療養生活をしていた。この年の夏が過ぎた頃から立原は辰雄をしばしば訪ね肝胆相照す仲となったのだらう。辰雄は私に、立原は外が暗くなっても仲々帰ろうとしなかった。いつも行儀よく真面目だったと言っていたが、私の印象はユーモアたっぷりだで明るい人という感じがしていた。

昭和九年の夏辰雄は、信濃追分の油屋のお小姓の間を陣取って過していた。立原もこの時初めて追分に行った。旅の好きな立原は信濃追分の美しい自然に魅せられたのだらう。そこはその頃

廃墟に近い宿場町で広大な原野にはさまざまな野の花が咲いていた。詩人立原が育つてゆくのに恰好の場所だったにちがいない。しかし彼はそこで九死に一生を得るような悪夢を経験しなければならなかった。止宿していた油屋の火事である。立原は私に眠ると火事の夢を見るので、眠るのも怖いと訴えていた。

十三年の私たちの結婚式には、辰雄の唯一の友人として参列してくれた。私たちが軽井沢の水源地近くに山荘を借りると、立原は新しく出来た恋びとを伴って訪ねてくれたが、私たちは父の病のために上京していて留守だった。その山荘のヴェランダの壁の上の方に

Wenn ich wäre ein Vogel!

と彼は落書をしたことを、二度目に訪ねてくれた時に白状していた。その時の疲れ切った容子を私は思い出す。

立原が初めて信濃追分で辰雄と共に過した九年の十月に月刊『四季』は創刊号を出し、三好達治さんと丸山薫さんと辰雄が編輯にあたっていたが、津村信夫さんと立原も手伝い、同人にも加わり、『四季』二号に初めて「村ぐらし」と「詩は」を發表している。それから立原はほとんど休みなしに毎号詩を載せていた。

立原は亡くなる前年、十三年の四月、九月、十二月号に「風立ちぬ」堀辰雄論を書いた。堀辰雄の世界に訣別する



堀夫妻：軽井沢 1412 山荘にて



立原道造 追分にて 1935年

決心をするのだが、盛岡の旅から戻ったあと辰雄への便りに『風立ちぬ』を先月も書いたのですが、四季原稿あつまりすぎてのせるのをやめて手もとにおいておいたら自信急に失せ十二月号で『風立ちぬ』をつづけない文章を書いて もうおしまひにしようとおもつてゐます はじめはうさぎのやうにいきほひがよかつたけれどもいまはすつかり だめになつてしまひました」とあつた。そして立原は長崎への旅に出発する前、逗子に住む辰雄を訪ねている。

十年続いた『四季』は昭和十九年、用紙統制のために不要なものとして廃刊勧告をうけ、六月二十七日発行の八十一号が終刊号となつた。この終刊号の編輯は杉並の私どもの家で行われた記憶がある。田中克己さんが「堀さんがしかたがないねと言つた」と書いておられたのを読んだ気がする。

「秋季企画展」立原道造と『四季』の詩人たち」図録 一九九七年一〇月二日発行／館報『立原道造記念館』第三号 一九九七年九月二九日発行掲載

立原の親友だった生田勉さん

生田勉さんは第一高等学校の時、立原道造と同級で、東京大学では共に建築家を志す親友だった。辰雄は立原を紹介して生田さんを知った。

生田さんの文章に「立原は一年の時に校友会雑誌に小説『あひみてののちの』を書いて、一高生の文学青年から大いに注目された。そのときいまは亡い立沢剛先生や二級上の文芸委員だった高尾亮一氏などがとくに立原の才を愛でた。立原は当時、龍胆寺雄などの『新興芸術派』の作品を耽読していたが、立原が堀さんを訪れたのは、高尾氏の示唆によるもので、これはまことに適切な助言であつた。」とある。

生田さんが立原と一緒に室戸犀星宅を訪ねた時、辰雄が其処にいて知り合つたが、二人が親しく交わつたのは立原の死後のようだ。立原の全集編集のため遺稿整理で日本橋の立原家に一緒に رفتたり、また鎌倉に住む私たちの処にも度々来たりしている。生田さんは静かな人だった。

その頃、私たちは鎌倉で二階借りをしていた。実家の母は、杉並の家の庭の隅に小さい家を建てたと言つた。生田さんをお願いするほどの家ではなかったが、書斎の棚や窓など相談のつて貰い、完成を楽しみにしていた。しかし其処には半年ほどしか住まなかつた。母がその年の暮れに死に、未婚の弟一人が残つたので、私たちはせつかく出来た家を人に貸し、母屋に移つた。

辰雄の書簡集の中の、生田さんへ宛てた手紙に、庭の中に建てた小さい家の図面がかかっている。こんな家を建

てたいのだと依頼したのだろうが、実際に出来た家とはちがっている。途中で変更したのだろう。

生田さんは東京大学を定年退職された後、生田勉都市建築研究室を開設され、沢山の良い仕事をされた。私の知人でも深沢省三、紅子夫妻のアトリエは「アトリエの二つある家」として有名だし、佐々木基一さんの家も蓼科の別荘も生田さんの作品である。深沢紅子さんも立原を介して生田さんと親しく、生田さんが脳腫瘍の手術をされたことを私は深沢さんから知らされた。

生田さんに最後にお目にかかったの



生田勉 1969年

は、中村真一郎さんのお宅へ行く途中で、千駄が谷駅前の横断歩道だった。信号が赤で、向うとこちでお互いに認め、駅前で立ち話をした。中村さんにその話をしたら、生田君の事務所はこの近くだと言ったことを思い出す。

今回、開館一周年にあたり、立原と生田さんが共に志した「建築へのメッセージ」を主題とした展示を行うことになった。生田テル夫人をはじめとして、小場晴夫さん等多くの方々、東京大学建築学科等の団体からのご協力を頂き、ここに厚くお礼を申し上げる。

「開館一周年記念特別展「立原道造

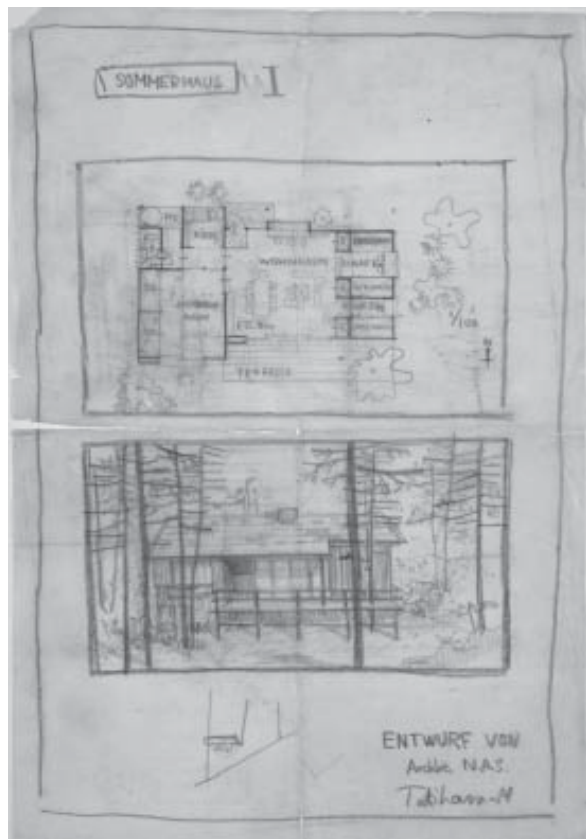
と生田勉「建築へのメッセージ」図録 一九九八年三月二九日発行掲載

いあこさつ

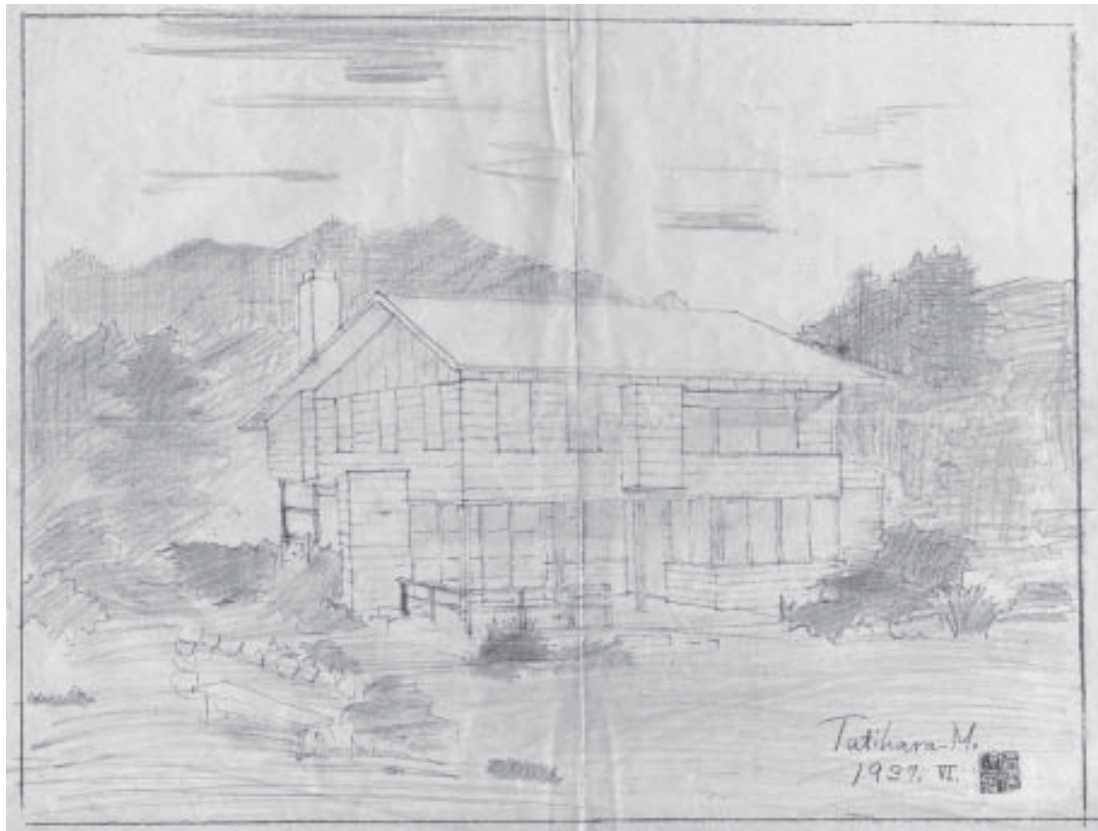
立原道造は昭和九年の夏、堀辰雄を訪ねて初めて軽井沢の地をふみました。丁度その時堀は用事で上京を余儀なくされ、軽井沢の案内を友人の阿比留信さん（本名豊田泉太郎）に依頼する手紙を残してゆきました。そんな縁もあってその後、阿比留さんが軽井沢に山荘を建てたいと思われた時、立原に設計を依頼され、立原は喜んで設計図を製作したのですが、その頃（昭和十二年）大陸での戦争が本格化し始め、

御父上の御意見もあって実現出来ませんでした。しかしその設計図は阿比留さんが大切に保管し、戦火をのがれて現存しています。

立原が残した建築スケッチのなかに「SOMMERHAUS（独語で夏の家）」と題されたものがあります。これは堀辰雄の短篇「緑葉歎」に書かれている、堀が立原に依頼した夏の山小屋の図面ではないかと思われるのです。堀は南軽井沢に別荘を建てたいと思っていた丸岡明さんに「君もそばに小さい小屋を建てたら」と言われ、一寸その気になったようで、木の机と木のベッドと窓が一つあればいい、五十円もあればいいと思ったようです。しかし立原が



SOMMERHAUS [1936年5月]



豊田氏山荘外観 [1937年]

設計してきたものにはヴェランダなどもあり、到底五十円では出来そうもない、いろいろ計算すると二百円は必要だということになりました。堀はもう勝手にしやがれとばかりに折角の設計図をそこにおっぱり出してしまったようです。「ささやかな夢を見て楽しんでみると、とかく第三者がその夢を否定なしに大きなものにさせてしまつて、当人を不幸にさせがちなものです。」と書いています。

本展では、阿比留さんの実現出来なかった山荘の設計図と、判然としませんがたしかに堀が依頼した山小屋の設計図、それに手製詩集『ゆふすびびとの歌』など、浅間山麓で育まれた作品を中心に展示いたしますので、ご高覧いただきたく存じます。

「夏季企画展『立原道造の〈SOMMERHAUS〉——浅間山麓で育まれた作品世界——』パンフレット
一九九八年七月二日発行／館報『立原道造記念館』第六号 一九九八年六月二九日発行掲載

立原さんとアサイさん

昭和十三年頃、辰雄は立原さんの健康をしきりに案じていた。辰雄の作品「木の十字架」に次のような下りがある。

その夏まへからだいぶ健康を害して、一年ほど前から勤め出してゐた建築事務所の方もとかく休みがちらしい。さうしてなかば静養を口実に、好きな旅にばかり出てゐるやうだつたが、夏のさなかの或日なんぞ、新しく出来た愛人を携へて、漂然と軽井沢に立ち現はれたりした。さう云へば、あのときなんぞ彼の弱つてゐた身体には、私達の山の家まで昇つてくる道がよほど応へたと見え、最初は口もろくろく利けずに、三十分ばかりヴェランダに横になつたきりでゐた。息苦しさうな彼の姿がいまでも目に浮ぶ。——私と妻とはときどきそんな立原がさまざまな旅先から送つてよこす愉しうな絵端書などを受取る度毎に、何かと彼の噂をしあひながら、結婚までしようと思ひつめてゐる可憐な愛人がせつかく出来たのに、その愛人をとほく東京に残して、さうやつて一人で旅をつづけてゐるなんて、いかにも立原らしいやり方だなぞと話し合つてゐた。

——「恋しつづ、しかも恋人から別離して、それに身を震はせつづ堪へる」ことを既に決意してゐる、リルケイアンとしての彼の真面目をそこに私は好んで見ようとしてゐたのあつた。

「木の十字架」は立原さんが亡くなられた翌年、立原追悼の気持で書き、『知性』の七月号に載せたものである。



水戸部アサイ 1938年頃

この夏の日に先きだつて、立原さんはアサイさんを伴つて五月頃、私たちの山の家を訪ねていた。その日私たちは辰雄の父の病の知らせを受け、上京中だった。二人は誰もいない家のヴェランダで三時間近く休み、山を下りた。その時、立原さんは彼以外の者には手の届きそうもないヴェランダの壁の高い処に、

Wenn ich ware ein Vogel!
 (註「もし私が一羽の鳥だったら!」の意
 と、青鉛筆で書き残していた。

私はその夏の只初めてアサイさんに会った。立原と同じ事務所に働く女性と聞いていたが、いかにも立原さんの好きそうな楚々とした高原に咲く花のような感じを受けた記憶がある。立原

さんの没後、立原さんの周囲にいた友人たちはアサイさんの悲しみを汲み、静かにそつとしておくのが一番だと思つていたようだった。私はそのあと、彼女に会う折が二、三回あった筈だがゆつくり話をした記憶はない。十年ほど前、追分にわざわざ訪ねて来られた時も私は留守をしていて会えなかった。そのことをずっと残念に思っている。アサイさんも今はもういない。

〔没後六〇年記念特別展『「優しき歌」の世界 立原道造と水戸部アサイ』図録 一九九九年三月二七日発行／館報『立原道造記念館 第九号 一九九九年三月二九日発行掲載〕



在りし日の堀多恵子館長と鹿野琢見理事長
 堀辰雄詩碑除幕の日に（於：堀辰雄文学記念館 2001.10.21）

休・閉館のご報告と 今後の方針について

宮本 則子

「はじめに」で申し上げましたように、立原道造記念館は、諸般の事情により昨年九月に休館することとなりました。その経緯は、二〇一〇年七月七日付の文書にて、関係各位にご報告し、ホームページにも掲示しましたが、以下に、その全文を掲載させていただきます。

立原道造記念館の運営について

(現状報告とお願い)

時下、ますますご清祥のこととおよろこび申し上げます。

平素は、当館の事業につきまして格別のご理解とご協力を賜り厚くお礼申し上げます。

本日は、当館の運営の現状と今後の方針をご報告いたしたく、認めさせていただきます。

立原道造記念館は、故立原達夫氏(立原道造のご令弟)の《立原道造を顕彰し後世に伝えたい》という強い志に賛同いたしました故鹿野琢見氏により、一九九七年三月二十九日、私立の記念館として開館いたしました。

しかしながら、長引く経済不況という社会情勢の中で、開館以来、赤字経

営を余儀なくされてまいりましたが、故鹿野氏のご尽力を中心といたし、後援団体である立原道造の会および有志からのご援助によりまして、何とか運営してまいりました。ところが、二〇〇九年一月三日、鹿野氏のご逝去なさるといふ哀しい仕儀となり、大きな後ろ盾を失うこととなりました。

当館では、このような窮状に陥りましても創立者のご遺志を尊重いたし、また、立原道造の会および立原道造を愛する方々等からの更なるご支援を賜り、一日でも長く開館を続けてまいりたいと様々な施策を講じ、現在まで運営いたしてまいりました。

しかし、芸術活動に対する社会情勢は好転の兆しが見えず、当館のような財政基盤が極めて脆弱な記念館の存続には、大変厳しい現実に向直面した日々が続いております。

つきましては、この度、断腸の思いで、下記のような選択をいたす仕儀となりました。

皆様方におかれましては、この選択をご理解の上、今後とも更なるご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

敬具

記

1 現在開催中の、開館一三周年記念特別展「立原道造が遺したものと

ち 愛蔵品を中心として」(会期・二〇一〇年一月二七日―九月二六日)終了後の九月二七日から、記念館は、休館することとする。

2 立原道造の会は、立原顕彰を後援するとともに、立原を愛する方々との絆を大切にしてください。今後とも存続させることとする。従って、例年行ってきた風信子忌(墓前祭・講演会・懇親会)も、開催を継続する。なお、事務局を何処に置くかは、今後の検討課題とする。

3 記念館の休館後は、館報『立原道造記念館』も休刊とするが、代わりに、現在休刊中の立原道造の会の会報『風信子通信』を復刊させ、立原顕彰と関係各位への広報誌とする。

4 休館後の「立原道造の顕彰方法」については、関係者間で十分協議し、各位の納得出来る結論を導き出すよう鋭意努力をする。そして、二〇一〇年一〇月中には、顕彰方法の詳細を、改めてご報告することとする。

以上

この七月七日付の文書では、昨年一〇月末までに今後の方針をご報告するお約束でした。しかし、関係各位との協議を行うにあたり、当館所蔵の全ての資料を再度確認の上、詳細なリストを作成する必要が生じました。その作業に膨大な時間をとられる仕儀となり

ましたが、学芸員の奮闘に加え、立原道造の会の有志がボランティアでご助力くださったこともあり、この度作業も終了し、関係各位との協議にも進展がありましたので、左記に改めてご報告します。

立原道造の会の現状報告および 今後の方針について

1 立原道造記念館は、二〇一一年二月二〇日をもって、閉館する。

2 閉館後、記念館所蔵の立原道造関係資料一切は、一時的に窪島誠一郎氏(信濃デッサン館・無言館等館主)に寄託する。また現在寄託中の個人所蔵資料も寄託者にご相談し、資料の散逸を防ぐため、窪島氏へ寄託して頂くようお願いする。

3 閉館後の「立原道造の顕彰」は、立原家・鹿野家・窪島氏とで協議した結果、4の通り、立原道造記念館の下部組織であった立原道造記念会(宮本則子代表)が引き継ぎ、信濃デッサン館と協力して行うこととする。

4 立原道造の会は、立原顕彰を後援するとともに、立原を愛する方々との絆を大切にしてください。今後とも存続させることとする。従って、例年行ってきた風信子忌(墓前祭・講演会・懇親会)も、開催を継続する。会則を改訂し、事務局は立

原道造記念会に置くこととする。

※記念会連絡先

〒一〇七―〇〇五二

東京都港区赤坂六―四―一五九〇一
ファックス 〇三三三五〇五三三〇三

5 現在休刊中の立原道造の会の会報『風信子通信』を復刊させ、昨年の講演録をはじめ、研究論文、立原顕彰に関わる記事等を掲載し、会員に届ける。

信濃デッサン館の立原道造展

窪島氏のご助力により、昨年、立原道造展が二回、信濃デッサン館別館の槐多庵と同別館のキッド・アイラック・アート・ホール(世田谷区明大前)で開催されました。以下に展示の概要をお知らせします。

「立原道造展

―夢はいつもかへつて行つた―

会期 二〇一〇年五月一日―六月三〇日

主催・会場 信濃デッサン館

長野県上田市東前山三〇〇

電話 〇二六八―三八―六五九九

協力 立原道造記念館・立原道造の会
立原道造が愛した軽井沢にも近い、信州上田市の槐多庵での開催となりました。パステル画や詩集原稿等、豊田氏山荘の設計図や模型、ヒアシンスハウスの模型等、立原の仕事が一望でき

る展示となり、遠方からも多数ファンが来館され、盛況の内に終えました。

また、今後の立原道造の顕彰についての詳細は、引き続き協議中ですが、現在決定しているところでは、信濃デッサン館を二〇一一年末に一時的に閉館し、立原道造記念室(常設)を増築し、来春には開室する計画となっています。詳細な日取りが決まり次第、改めてご報告します。

「立原道造展―パステルはやはらかし―

会期 二〇一〇年七月一日―九月三日

主催 信濃デッサン館

会場 キッド・アイラック・アート・ホール3・4F

東京都世田谷区松原二四三二―一

電話 〇三三三二二―五五六四

パステル画を中心にした展示会となりました。初日には、上田市の会場と同様にオーピングパーティが催され、今までとは趣が違った視点の立原道造展が行われました。

立原画「ブラ・ブラモン」



後記

昨年春、関係各位宛に送った当館の窮状を訴えた現状報告をご覧になった五四名の方々から、多大なご寄付を頂きました。皆様からのご芳志によって、本年二月までの資料整理および新たな顕彰の場を得るための協議をする時間を得ることが出来ました。

この場を借りまして改めまして深く御礼申し上げますと共に、慣れない状況でいろいろといたらない面があるかと存じますが、引き続きご助力を仰ぎたく、よろしくお願い申し上げます。

なお、立原道造の会の会員数は、二〇一〇年二月末現在で、名誉会員一〇名、維持会員一〇三名、一般会員一八〇名となっています。

当館は、二〇一〇年九月二六日で休館しました。最終日には二六〇余名の方々が来館され、休館後のささやかなお別れ会にも多数ご出席され、名残りを惜しんでくださいました。

窪島誠一郎氏という心強い協力者を得て、信濃デッサン館に資料を託し、当館は、本年二月二〇日をもって閉館しました。館員一同、皆様方のこれまでのご温情に心から感謝しています。

館報は、今号にて休刊します。

立原美智子氏を悼む

立原道造のご令弟故達夫氏夫人で、立原道造の会名誉会員の立原美智子氏が、二〇一〇年二月八日、八六歳のご生涯を閉じられました。ここに哀悼の意を表しますとともに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

【訂正附記】

館報第五二号記事「資料紹介 立原道造旧蔵 東京市電乗換切符」の記述に誤記がありました。以下にお詫びして訂正します。「誤↓正」

八頁一段六行目 三中↓一高

風信子忌のご案内

二〇一一年三月二六日(土)、墓前祭は多寶院、式典・講演会・懇親会は、上野池之端鵜外荘にて開催します。

講演は宮崎駿氏にお願いしました。なお、関係者へのご案内は、三月初旬に発送しますので、どうぞご参集ください。

(宮本則子)

立原道造記念館 第五三号

発行日 二〇一一年二月二〇日

発行人 宮本則子

発行 立原道造記念館 〒二二二〇三三

東京都文京区弥生二四一五

電話 〇三(五六八四) 八七八〇

編集者 宮本則子

<http://www.tachihara.jp/>